

令和4年度 学校自己評価表 （最終評価）

鳥取県立倉吉総合産業高等学校

教育目標	1 誠実な心を育て、たくましく生きる力を養い、個性豊かな人間形成を図る。 2 実践的な学習をとおして、創造する喜びを体験するとともに自主・自律の態度を養う。 3 様々な教育活動をおとして、他人を思いやり、友情を育み、さらに心身ともに健全な態度を養う。 4 望ましい勤労観・職業観を育て、地域産業を支える人材を育成するとともに地域の発展に貢献する。
------	--

重点目標	1 心身ともに健やかな生徒の育成 2 生徒の夢や希望が叶えられる学校づくり 3 地域に愛され、信頼される学校づくり 4 専門教育の推進
------	--

年度当初				評価結果(最終)			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 心身ともに健やかな生徒の育成	基本的生活習慣の確立とマナーの徹底【生活部】	・『あいさつ』『時間』『身だしなみ』の三点を中心に、基本的生活習慣の確立を目指して取り組んでいる。概ねできているようだが、高いレベルでの確立についてはまだまだ意識の低さを感じる。 ・礼法・遅刻・整理整頓指導をととして、生活を整える習慣を身につけさせたい。防げる遅刻は41回だった。	・年間の『防げる遅刻』回数を20回以下とする。(昨年度は20回) ・校内外で、明るく気持ちのよい、心のこもったあいさつができる。 ・学校アンケート(保護者)の『規律・マナー』項目と(生徒)の『挨拶』項目の1・2評価の平均を90%以上とする。(昨年度は共に87%)	・時間を守ることの意義を伝え、理解させる。 ・昨年度以上に、多くの機会(授業や部活動、SHR、集会等)を活用し、あいさつの大切さを生徒に伝える。 ・生徒会執行部、学科、部活動と連携して、生徒が主体となった『さわやかあいさつ運動』に取り組む ・引き続き8時30分着席・朝読書の定着を目指し、教職員も意識して5分前には教室に行き指導する。	・1/31現在、防げる遅刻47回(R3:28回)と激増しており、二年連続で防げる遅刻20回以下は達成できなかった。防げる遅刻47回の内訳が、1年18回、2年17回、3年12回、科別では、M科9回、E科14回、C科13回、D科11回であった。 ・あいさつについては、すべての生徒が気持ちのよいあいさつができていえるとは言えないが、12月実施の『学校生活アンケート』の保護者回答(問11・規律・マナーについて)は1・2評価が86%(7月・84%)、生徒回答(問12・気持ちのよい対応について)も92%(7月・91%)と高い数値を示し、生徒の回答については目標値の90%以上が達成できた。	B	・最近「あいさつができなくなった」という声をよく耳にするが、引き続き、教職員が様々な場面で時間を守ることの意義やあいさつの大切さを生徒に伝えていきながら、教職員自身も昨年度と同様に積極的なあいさつを心がけ、授業や部活動、諸会議等においても時間を守る姿勢を実践し、自らの姿をおして生徒に伝えることを大切にしていこう。 ・生徒玄関の遅刻ボードや遅刻メッセージの掲示物を有効に活用し、遅刻の多い生徒への個別指導や家庭連絡を今まで以上に徹底する。 ・今まで以上に、生徒会執行部によるあいさつ運動の実施、さらに、科や学年、部活動との連携に努め、遅刻やあいさつに対しての意識を高めていく。
	部活動・生徒会活動の奨励【生徒部】	・今年の4月時点の部活動等加入率(1年97% 2年90% 3年97%) ・生徒会執行部の学年別構成(1年0人 2年9人 3年17人) ・執行部会は生徒会行事前にも開催 ・学校生活アンケート結果(昨年の7月→12月) 学校行事に楽しく参加協力できた92%→93% 部活動に積極的に取り組んでいる84%→79% ・先生に言われて活動する場面が見られる	・加入率の引き上げ(執行部加入も含めてカウントし、加入率95%以上を目標とする) ・執行部への1.2年生の積極的参加 ・生徒会執行部会およびクラブ運営委員会の定例化 & 活性化 ・生徒自身による主体的な体育祭・学校祭の企画運営	・部活動未加入者への執行部・学校実行委員会への参加呼びかけをする。 ・LHR等の学年レクリエーションにおいて執行部員を活用する。 ・会議を定例化し、Googleクラスルームの活用を行う。 ・他校の学校祭の見学や執行部との交流の推進をする。	・R5年1月末時点の加入率が、1年生98%、2年生84%(R4年1月末1年生86%2年生96%)。2年生の加入率が特に低い。ただ、1年時86%からほぼ変わっていないので上がることは難しいと思われる。1年生は98%と加入率が高いので維持していきたい。 ・執行部1年生3人、2年生18人と昨年同期とほぼ同じ。 ・学校祭等各行事の準備で3年生とともに2年生も活躍し、生徒が主体的に取り組めるようになってきたが、執行部会の話し合いは、充分できなかった。 ・Googleクラスルームを活用してアンケートができた。 ・新型コロナの影響で他校との交流は実施できず。	B	・引き続き部活未加入者に対する声かけを進めていく。 ・体育祭・学校祭・球技大会等の行事に向けて、実行委員会の生徒による自主的な活動をより促進していきたいながら、次世代育成も進めていく。 ・Googleクラスルームの活用を各行事の事前アンケート等で一層進めていく。 ・執行部会の定例化。
2 生徒の夢や希望が叶えられる学校づくり	進路指導の充実【進路部】	・具体的な進路目標を定めているが、目標のために何をどのように取り組めば良いか計画できない生徒が多い。また、基礎学力の定着や文章力、表現力が十分身についていない。 ・就職希望者支援体制についてはできているが、進路指導に関しては、個別指導による部分が多い。 ・昨年度も年度内の就職内定率が100%であった。 ・リモートによる応募前職場見学や面接試験、適性検査が増加し、進路部職員だけでは対応できなくなりつつある。	・計画的に進路行事を実施し、キャリア教育を充実させる。 ・学習指導委員会による進学支援体制を確立させる。 ・年内に就職内定率を100%とする。	・進路意識を持たせるため、進路講演会、進路学習会、進路説明会、進路LHR等を実施、職業観・勤労観の育成に努める。 ・大学入試に関する情報収集を行い、個別指導を中心に指導する。 ・進路部と学年団・各科との連携を密にするとともに、学力分析や指導方法について検討していく。 ・12月から2年生の進路指導に取り組み、2月学年末考査後には具体的な進路実現に向けて行動できるよう、計画的に個別に指導していく。 ・新型コロナウイルス感染症に対応するため、職場見学、オープンキャンパス、試験に向け、ICTを活用していく。 ・リモートによる応募前職場見学や面接試験、適性検査が増加し、進路部職員だけでは対応できなくなりつつあるため、3年学年団にも協力を依頼する。 ・定着指導・求人依頼・企業開拓のため、進路部を中心に県内の企業を積極的に訪問し企業や産業界の情報を収集し、共有する。 ・4月以降3年生全員に対する進路部との面談を行い、進路指導がよりスムーズに行われるようにする。 ・1・2年生対象の進路講演会を早期に開催することで、基礎学力の必要性を理解させ、向上を目指すよう取り組ませる。	・就職54名、進学80名(四大17人、短大15名、専門学校48名)の進路希望であった。就職希望者、進学希望者ともに進路未決定の生徒が数名残っているが方向性は決まっている。 ・学校推薦型選抜で学科試験や小論文が課されるケースが増えたため、個別指導で対応した。また、小論文指導については職員の研修会、国語科に協力していただいた小論文の書き方指導とともに朝読書の時間に小論文の良文を読ませる時間を設けて指導の充実を図った。 ・就職については応募前見学や就職試験が、進学についてはオープンキャンパスや入学試験がリモートにより行われることがあり、事前に準備をすることで対応した。 ・進路講演会、進路学習会、進路説明会、進路LHR等を新型コロナウィルス感染予防を意識しながら実施することができた。 ・1・2年生対象の進路講演会を校外模試前に実施し、基礎学力向上の重要性を講演していただいた。校外模試の結果に向上が見られた。 ・4月に3年生就職希望者に対する進路部との面談を行い、その後の進路指導に活かすことができた。	A	・個人面接を積極的に行いながら早期に進路意識が高められるよう指導を徹底する。 ・3年生の就職希望者に対してより確実な進路指導を行うために、年度当初に進路部就職担当との面談を計画する。 ・四大、看護、医療、栄養系に進学する生徒に対して、進学後に必要な学力をつけるため、自由登校期間中の補習(理科、数学、英語)を充実する予定である。 ・1年生から進学希望者補習を実施して、大学、短大等を希望している進学希望者の学力向上を図る。
	将来のスペシャリストの育成(資格・検定の取得やインターンシップ)【進路部】	・進路部で資格・検定を推進している。各科目で目標としている資格・検定に挑戦している。 ・インターンシップ・デュアルシステムをとおして正しい職業観を養うことを目的としているが、予定どおりの実施ができしていない。	・資格取得を意欲的に取り組ませる。 ・1年次から進路意識の向上とインターンシップ・デュアルシステムを充実させ、勤労観・職業観を育成する。	・資格取得・上級資格取得のための計画的で充実した補習を実施する。資格試験の情報提供を行う。 ・多様な進路選択を可能にするためにも資格取得にチャレンジするように促す。 ・インターンシップ・ビジネス実習の事前・事後指導を行い意識の高揚を図る。	・危険物取扱者試験の受験者数が例年の約10倍になるなど、積極的に資格取得に挑戦している。 ・昨年度は中止したインターンシップを実施することができ、生徒の職業観や勤労観を養うことができた。	B	・資格試験の合格に向けて、自発的に取り組む生徒の育成に努める。 ・インターンシップ、ビジネス実習は、生徒の職業観や勤労観を養ううえで重要な役割を果たしている。実施できなかった場合に備えて、それに代わる企画を年度当初から準備しておく必要がある。 ・事後指導の時間が少なく、充実した報告会に至っていない。来年度に向けて、時間確保できるよう計画を立てる。
	進路に対応できる学力の定着【教務部】	・生徒の基礎学力や学習意欲に大きな差がある。定期考査や資格取得などに関する学習には意欲的であるが、それ以外の家庭での学習時間は少ない生徒が多い。 ・授業時間数に偏りが生じている。 ・売り買いボードの活用状況は十分ではない。 ・進路に応じた選択科目の履修ができるよう説明会を実施し、生徒の実態と進路希望に合わせるため学校設定科目を設置し対応している。	・学習習慣が定着し、基礎学力の向上が図られている。 ・生徒全員の家庭学習時間が平日1時間以上、休日2時間以上となっている。 ・授業時間数が確保され、自習時間が削減されている。 ・進路に応じた選択科目が適切に履修されている。	・ICT機器を有効活用し、授業での小テストや自宅での課題などで授業の振り返りの機会を増やすことで基礎学力の定着を図る。 ・時間割の入れ替えや授業の売り買いを積極的にを行い、授業が自習時間とならないように取り組む。 ・選択説明を丁寧に言い、進路希望に合った履修を促す。	・教職員のICT機器の効果的活用について研修・実践を行っているが、十分に活用できているまでには至らない。 ・進路目標が明確な生徒や資格取得に積極的な生徒は主体的に学習に取り組むが、学習意欲においてそうでない生徒との差が見られる。校外模試の結果もDランクの割合が少しずつ増えており学習意欲の向上が急がれる。 ・科目選択に関する説明会を実施し、一次・最終調査を実施し、確定した。	B	・ICT機器の効果的な活用方法と活用機会を増やす方法の検討を引き続き行う。 ・授業において学習規律を守れることを徹底し、クラス全体が授業に向かう雰囲気を保つ。生徒一人一人が校外模試の結果などから学力の定着度を分析する(受け止める)時間を確保し、自身の将来に向けて何をすべきか考えさせることで学習意欲を向上させる。 ・来年度も生徒の希望を確認しながら選択科目の調整を進める。
思考力・判断力の向上【教務部】	・生徒は落ち着いて生活しているが、反面、主体的に学習に取り組んだり、自ら考え判断し、自発的に行動したりすることができる生徒が少ない。	・思考力や判断力の育成のために、課題探究的な学習や対話的な学習活動が実践されている。 ・達成感や自己肯定感を持った生徒が多い。	・教科に関係なく、多くの授業を見学し参考にする機会を多く設け授業改革を行う。 ・新学習指導要領に対応した授業研究と本校教育課程の検討を継続して行う。 ・学習内容や学習評価など新教育課程の内容の理解を進め、学習内容の向上を図る。 ・学校生活の中で、生徒が活躍できる機会を増やす。	・年度の早い時期に研究授業の実施をお願いしたが、年度末に集中して実施された。参加者が少ないことが多くあり、改善が必要である。 ・新学習指導要領に対応した授業研究と本校教育課程の検討を継続して行う。 ・分掌・教科が連携し、体育祭・インターンシップ・課題研究発表会など、生徒が表現できる機会を確保できた。	B	・研究授業の早めの実施と、教科の枠を超えて積極的に参加することを呼びかける。 ・教育課程の移行期間となるため、問題が生じた場合に早めの対応を心がける。 ・各分掌と連携し生徒の活躍の場を確保するよう務める。	

年度当初					評価結果(最終)	
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価
3 地域に愛され、信頼される学校づくり	地域とともにある学校づくり (学校運営協議会) 【管理職】	・学校運営協議会を3回開催したが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、学校運営協議会の委員を始め、地域の方が学校を訪問して生徒の活動を見てもらうことはほとんどできなかった。 ・一方で学校ホームページには多くの記事のをせ、閲覧数も増えた。	・学校運営協議会の委員や地域の方の来校があり、地域に開かれた活気のある学校になっている。 ・学校ホームページの閲覧者が多く、地域と連携した活動が盛んに行われている。	・学校が作成したもの(カレンダーや学校案内)を学校運営協議会の委員に届けるとともに、積極的に生徒の作成品の展示や学校からの情報提供を行う。 ・各種イベントを可能な限り、保護者や地域の方の参加や見聞ができるよう場所を選定し、ICT機器の活用を行う。	・新型コロナの影響があり、学校運営協議会委員の学校への訪問はほぼ学校運営協議会に限られた。ただし、学校運営協議会では今後の学校の在り方に資する意見や助言が得られた。 ・ホームページの記事のアップは1月25日現在で224件、アクセス数も98,719である。学校全体で情報発信の意識が上がっている。	B
	地域への情報発信 (積極的な広報活動) 【総務部】	・ホームページ記載更新が行われ、学校行事、各科の学習活動、部活動の大会状況が配信されている。	・学校行事について、積極的に総務部から各担当者にホームページへの掲載を依頼したり、ライブ配信によって生徒の様子を配信する。また、新聞社やテレビ局などマスコミにも適宜情報を提供する。	・学校行事について、積極的に総務部から各担当者にホームページへの掲載を依頼したり、ライブ配信によって生徒の様子を発信する。また、新聞社やテレビ局などマスコミにも適宜情報を提供する。 ・ホームページがさらに充実するように、更新頻度の少ない学習活動・部活動に依頼する。	・学校行事などについて、積極的に担当者からホームページの更新が行われていた。 ・学校祭では校内限定だが、動画を配信した。 ・新聞社やテレビ局などマスコミに情報を提供し多く取り上げていただいた。	A
	地域・産業界との連携・交流 【各学科】	M ・昨年度は企業見学は実施できたが、新型コロナウイルス感染症の影響で社会人講師導入事業やインターンシップは中止や代替での実施となり、地域・産業界との交流機会が減ってしまった。	・企業見学、インターンシップ、社会人講師等をおとして、自分の希望する企業について業務内容などを理解している。 ・地域の方と交流することで機械科の魅力を発信する。	・企業見学、インターンシップ、社会人講師等で産業界での取り組みや意識を知る機会を設ける。 ・地域の方と交流できる機会をつくる。	・本年度は予定とおりインターンシップを実施し、事前指導として外部講師により、働くときの安全や危険予知等について指導していただいた。 ・新型コロナウイルス感染症の影響で2年間途絶えていた鳥取県自動車整備振興会中部支部主催の「高校生自動車整備体験学習」へ参加することができた。 ・課題研究においてドローンを持ちて上北条コミュニティセンターと交流を行なった。	A
		E ・鳥取県電業協会中部支部との共同作業で、倉吉交流プラザにイルミネーションを取り付け、地域に貢献した。 ・「電気の技術を生かした福祉活動」の活動について、地区民生委員の方と電業協会中部支部と連携をし、地域に貢献した。	・イルミネーションの取り付けなど、地域産業との交流が図られている。 ・地域の家庭に向向き、奉仕活動することで地域住民との連携が図られている。	・鳥取県電業協会中部支部との意見交換会でイルミネーション設置について、アイデアの提案等を行う。 ・「電気の技術を生かした福祉活動」の活動前後で民生委員、電業協会、教職員・生徒との意見交換を行い連携をとる。	・鳥取県電気工事業工業組合中部支部と適宜連絡を取り合い、イルミネーションの設置・点灯式・撤去を無事完了することができた。 ・「倉総電気福祉活動～電気を通して福祉を考える～」について、倉吉市社会福祉協議会担当者をおとして、住民の要望も事前に詳しく知ることができ、地域との交流が図られた。	A
		C ・新型コロナウイルス感染拡大の影響から、課題研究「くらそうや」「くらそうサロン」、就業体験学習「ビジネス実習」の実施回数が減少した。	・課題研究「くらそうや」「くらそうサロン」、就業体験学習「ビジネス実習」「インターンシップ」を通して、地域の方々との交流や事業所との連携から、地域産業の理解が深められ郷土愛が育まれている。	・課題研究「くらそうや」「くらそうサロン」、就業体験学習「ビジネス実習」「インターンシップ」は、新型コロナウイルス感染症予防に配慮しながら、学習内容の充実に努めていく。	・「ビジネス実習」と「インターンシップ」を実施することができた。 ・課題研究「くらそうや」では、事業先と連携し、オリジナル新商品を開発した。「くらそうサロン」は、多くの方が参加され、毎回好評を得た。	B
		D ・交流計画・準備は意欲的に取り組んでいる。しかし、参加者の視点を考えて内容を考えることは難しく、表現方法も自己満足で止まっている生徒が多い。	・交流する相手の心身の状態など、学習した内容を踏まえた内容で計画を立てることができる。どの年代の人にも伝わるコミュニケーション技術を身に付ける。	・交流では、計画立案の際にねらいを明確にさせ、施設側の意見を反映した内容にする。また交流だけでなく、社会人講師など地域の方と接する機会を複数回設けることで、コミュニケーション技術の向上をはかる。	・課題研究の保育園実習は合計6回行った。ねらいを達成するために、生徒が園児との交流の中でわかったことや、これまで学んだことをともに保育教材を製作し、保育活動に活かした。それにより、交流がより深いものとなった。 ・高齢者福祉施設の利用者とりモートによる交流を実施した。(3年生は11月、2年生は3月を予定) ・保育交流は、1・2学期ともに新型コロナ感染拡大により直前で中止となった。	A
		M ・日頃の学習内容は理解できているが、それが地元の産業と、どうつながっているかまでは理解できていない生徒が多い。	・地元企業がグローバルに活躍されていることを知り、学ぶことの意識が高まっている。	・企業見学やインターンシップを実施する前に、事前学習として、どのようにグローバルに活躍されているかという視点をもって向かわせる。	・例年3学期に実施していた1・2年生の企業見학을コロナウイルス感染症の流行時期を避け12月の下旬に実施した。事前指導として見学させていただいた会社が、産業界でどのように貢献されているかという視点で見学するよう指導をして臨ませた。	B
	グローバルな人材の育成 (世界規模で考え、地域で行動する人材) 【各学科】	E ・新型コロナウイルスの関係で長期インターンシップや通常のインターンシップを実施することができなかったが、1日就業体験において生徒の就労意欲が高まり、基本的な技術を身につけることができた。	・インターンシップをおとして、就労意識が高まり、キャリア教育の充実が図られている。	・インターンシップの事前指導において安全教育を行うことで、就労意識を高めていく。 ・インターンシップの事後指導において、体験したことや地元企業について振り返り、自身の職業観・勤労観を高めていく。	・事前の安全教育、インターンシップを予定通り実施することができ、生徒の事後アンケートの結果でも「大変良かった(83.3%)」と「良かった(16.7%)」を合わせて100%だった。生徒は、体験を通して就労意識を高めることができた。 ・生徒が体験した事業所の数が他科より多かったため、事後指導(報告会)が時間内に収まらなかった。	B
		C ・新型コロナウイルスの感染拡大の影響から、就業体験学習「ビジネス実習」「インターンシップ」の受入事業先が少なくなっており、やむなく希望に合っていない実習先で体験する生徒がいる。	・生徒が希望する事業所での体験を通し、積極的に実習に取り組み、人間力と進路意識の向上が図られている。	・就業体験学習「ビジネス実習」「インターンシップ」の受入事業先を新規開拓する。 ・事前・事後の指導を行い意識の高揚を図る。	・12月の「ビジネス実習」は感染症対策に留意し、生徒の希望に沿うところで実施できたが偏りがあり、依頼していた企業に迷惑をかけた。生徒それぞれが目標を持って実習に臨み、実習先からの成果報告により、自己を客観的にとらえ人間力向上と進路意識がやや高まった。	B
		D ・地域の産業に対する理解が浅く、学校での学習とのつながりを認識できていない生徒がいる。	・地域産業について理解し、自らの学校の成果を活かしたり、発信したりすることができる。	・外部講師による講習や企業見学、先輩に学ぶなどの行事の実施。また、地元企業と連携し、商品開発を行う。	・講習会は、全学年あわせて10回程度実施し、地元企業・施設等の方に来ていただいた。専門的知識や技術を学ぶだけでなく、地域社会で活躍されている方との交流を通して、地域産業のに関する理解を深めることもできた。 ・課題研究食分野では、地元店舗や役場など新たな協力先を開拓し、開発した商品を販売することができた。販売会には多くの地元の方に来場していただいた。 ・1年生の企業見学を1月に予定していたが、新型コロナ感染拡大のため、中止となった。	A
		M ・昨年度は初めて挑戦する資格に積極的にチャレンジした生徒もいたが、まだまだ受け身の生徒も多い。	・積極的に資格取得に取り組み、合格に向けて努力できている。 ・社会にでた際、資格取得が重要であることを理解している。	・生徒が資格取得に積極的に向かうよう企業見学やインターンシップ等の機会を捉え、資格取得の重要性を呼びかける。 ・資格を取得することで達成感と自己肯定感を感じさせる。	・製図検定、各種技能検定など合格に向けて計画的に補習を実施した。前期の技能検定では6名の生徒が合格した。後期の技能検定では28名の生徒がチャレンジしている。	B

・今後も、生徒が資格・検定にチャレンジするように促していく。

年度当初					評価結果(最終)			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策	
4 専門教育の推進	専門分野の基本的知識・技術をもち、チャレンジ精神に富んだ人材の育成【各学科】	E	・社会人講師活用事業において、鳥取県電業協会中部支部に電気製図の指導を受け、生徒の知識・技術の向上を図ることができた。 ・新型コロナウイルスの関係で、鳥取県電業協会中部支部から高校生ものづくりコンテストに向けての技術指導を受けることができなかったが、1名の生徒が中国大会出場を獲得した。	・生徒の電気工事、電気製図などの知識・技術が向上している。 ・高校生ものづくりコンテストにおいて上位に入賞している。	・新型コロナウイルスに対する感染対策をしっかりととりながら、鳥取県電業協会中部支部の指導を受ける機会を作り、生徒の知識・技能の向上を図る。	・鳥取県電業協会中部支部に電気工事および電気製図の指導をしていただき、生徒は知識・技術を向上することができた。 ・令和4年度高校生ものづくりコンテスト電気工事部門中国大会に出場することができた。 ・令和4年度高校生ものづくりコンテスト電気工事部門県大会に1名が出場し、来年度の中国大会への出場権を得ることができた。 ・新型コロナウイルス感染症への対応から、ものづくりコンテストに向けて鳥取県電業協会中部支部の技術者からの技術指導を受けることができなかった。	A	・来年度も鳥取県電業協会中部支部との連携を深め、活動を継続していきたい。 ・来年度は、リモートや映像等も検討しながら、ものづくりコンテストに向けての技術指導を受けれるように取り組んでいきたい。
		C	・ほとんどの生徒が資格取得に積極的意欲的に取り組み成果を出している。 ・生徒間に著しい学力差がみられ、一斉授業に苦心している。	・資格取得に向けて計画的に努力し、チャレンジ精神を養っている。	・可能な限り、習熟度別や少人数の授業展開をしていく。 ・長期休業中や放課後に課外授業を実施し、上位級取得目標の生徒や学力不振生徒に対応していく。	・夏季・冬季休業期間、検定直前期に、課外授業や補習を実施した。 ・商業実技競技大会のワープロ・簿記の部で全国大会に出場した。	B	・「卒業までに全商1級3科目合格」を共通目標に掲げ、チャレンジさせる。 ・ビジネス研究部以外の生徒達にも、商業実技競技大会への参加を促し、挑戦させる。
		D	・おおむね意欲的に取り組んでいるが、チャレンジ精神旺盛とは言えない。控え目な生徒も多く、個人差がある。	・検定試験を積極的に受検する。また、コンテストへの応募や、ボランティア活動に参加する。	・各種検定・コンテスト・ボランティア活動への参加を促す。	・今年度はボランティア活動の実施件数が多かったため、昨年度よりも多くの生徒が参加することができた。 ・家庭科技術検定2級までは多くの生徒が取り組んだ。食物・被服(和服・洋服)1級に向かう生徒がならず、3種目1級を取得する3冠王はいなかった。	B	・ボランティアについては、今後も積極的にアナウンスしていく。 ・家庭科技術検定の3種目1級を目指す生徒が年々少なくなっている。食物・被服分野の知識と技術をより高めるために役立つので、来年度に向けて今から促していきたい。
	学科の枠を超えた取組の実践(総合選択制)【各学科】	M	・総合選択制を活用し他学科の科目を積極的に履修するよう働きかけができています。(A選択・電気基礎・アプリケーション演習) ・昨年度は、「くらそうや」で使用するスタンプや生活デザイン科からの要望で型枠を製作した。	・将来を見据えた適切な科目選択ができています。 ・機械科以外の科目について学ぶことも重要であることを知る。	・自分の進路を見据え、自科のカリキュラムでは学べない内容を総合選択制を活用し習得するよう指導する。 ・他科からの要望に応えていく。	・選択科目説明および総合選択制のメリットや活用方法について説明し、「電気基礎」や「アプリケーション演習」などの他科の科目について募ることができた。 ・電気科の課題研究「空飛ぶ車いす」班の修理部品と「マイコンカーの製作」班の車体部品づくりに協力することができた。	B	・他科との連携を意識し、要望があれば応えていくのと同時に機械科からも連携を提案していく。
		E	・「くらそうや」において「おもちゃの病院」を開き、おもちゃの修理を行うことができた。 ・「くらそうや」への「商品提供」を行うことができた。 ・生活デザイン科の車椅子を修理するなど、他学科からの依頼に対応することができた。	・「くらそうや」に電気科として「おもちゃの病院」及び「商品提供」ができています。	・課題研究「テクニカルボランティア」をとおして「おもちゃの病院」を行う。 ・電気工学部と連携して「商品提供」を行う。また、課題研究の中でもアイデアを出して、商品作成を行う。	・「くらそうや」で「おもちゃの病院」を行い、7つのおもちゃを持ってきてもらえた。そして、その内の5つを修理することができた。 ・電気工学部や課題研究の取組で、「くらそうや」で使用してもらう和風照明を製作し使用してもらった。	B	・来年度も「おもちゃの病院」の実施に向けて、ビジネス科と連携を計っていく。 ・来年度も電気の技術を活かした装飾物を製作し、「くらそうや」に提供していきたい。
		C	・課題研究「くらそうや」において、他科から販売商品を提供してもらっている。 ・総合選択制の他科選択「コミュニケーション演習」や「アプリケーション演習」で、ビジネスマナーや基礎的なワードやエクセル操作を習得している。	・課題研究「くらそうや」の商品を提供する他科に、消費者の反応や意見をフィードバックすることで、ニーズある製品作りに活かされている。 ・ビジネスコミュニケーションの知識や技能を習得し、学校生活で実践している。	・課題研究「くらそうや」にて、消費者と積極的にコミュニケーションをとり、商品に関する感想や意見を丁寧に聴く。 ・総合選択制の他科選択「コミュニケーション演習」「アプリケーション演習」「ビジネス基礎」の魅力を伝え、履修を促す。	・「くらそうや」では他科の生徒が作った商品を販売し、電気科と協力して「おもちゃの病院」にも取り組んだ。 ・「アプリケーション演習」では他科の履修者全員がビジネス文書実務検定に挑戦した。	B	・総合選択科目「ビジネス基礎」の魅力を分かりやすく伝え、履修者を増やす。 ・「くらそうや」のお客様と積極的にコミュニケーションをとり、商品に関する感想や意見を他科にも伝え、商品作りに生かしてもらう。アンケートをとることも考えてみる。
5 業務改善の取組	長時間の時間外勤務者の解消【管理職】	D	・ビジネス科と連携し、「くらそうや」へ商品提供を行っている。	・ビジネス科の「くらそうや」に商品を提供している。工業科とも連携している。	・他学科との情報交換を積極的に行い、連携の方法を検討する。	・「くらそうや」に製作した商品を提供するにあたり、昨年度の販売状況をもとにビジネス科と情報交換をし、売れ行きを振り返った。それをもとに売れた物と売れなかった物を精査し、売れ行きがよかった物を中心に製作した結果、昨年度よりも売り上げが良くなった。	A	・今年度の販売状況をもとに、売れ行きが良いものだけでなく、実用的なものを製作する。
			・年間を通じての時間外業務時間は前年度から184時間減ったが、360時間を超えた人数は12人と依然高い数値になっている。時間外が減じたのは10月以降の部活動に対する制約がかかってきた時期であり、実質的には業務が減り、負担が軽減したとは言えない状況である。	・年間の時間外業務時間が360時間を超えない。 ・職場全体に業務を分担する土壌があり、チームで仕事をこなす意識が浸透している。 ・衛生委員会で職場の安全衛生管理について建設的な意見が交わされている。	・オーバーワークにならないように部活動計画表をしっかりとチェックをし、その後提出される実績簿で確認をする。 ・衛生委員会で教職員の健康状態や環境について話し合い、その議論を「見える化」することで、一人一人が自分の勤務を見直す状況を作る。 ・「学年業務棚卸し大作戦」を活用し、効率的に業務を行うことや業務分担を促進させる。	・本校教職員の時間外業務は4～12月における月平均が19.7時間でR3年度の24.2時間を5時間ほど下回った。教職員の意識が上がっているといえる。 ・個々の職員を見ても昨年度のような月平均時間外業務時間が50時間を超える職員はなく、確実に業務改善が進んでいるといえる。 ・一方、学校評価アンケート(教職員)によると教職員のワークライフバランスは評価が低く、業務量が減じた分が生活の質の向上につながらず、多忙感の解消には至っていないと言える。 ・「学年業務棚卸し大作戦」を行い、業務の精選、時間外業務の削減を図ったが、思うように時間外業務の削減につながらなかった。	B	・業務の見える化を推進し、誰もが他者の働きぶりに関心を持ち、職場で支えあえる環境作りに心掛けた。 ・更なる意識の向上を目指す。一人一人が自分の働きぶりを振り返り、業務の優先順位を意識しながら、計画的に業務を進めることで、時間外業務の削減とともに、多忙感の解消を図りたい。

A〔90%以上〕 B〔89～70%〕 C〔69～50%〕 D〔49～30%〕 E〔29%以下〕